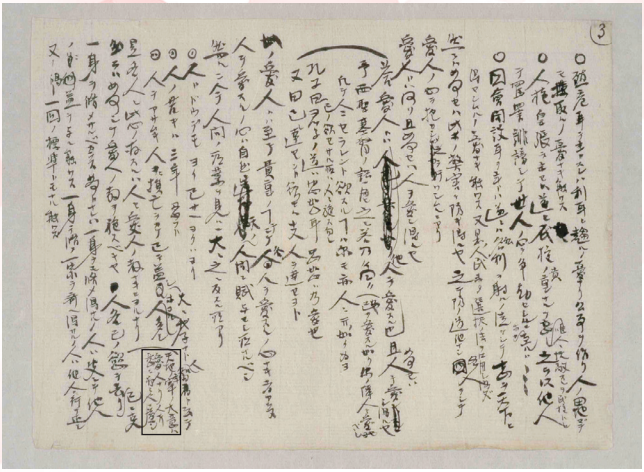
新島　襄の言葉



天地の主宰の大意は愛人なり。人その意を敬しみ愛すべし。
（同志社編『新島襄教育宗教論集』岩波文庫、295 頁）

女子大学学芸学部特任教授
中村（なかむら）　信博（のぶひろ）

自由民権運動と国会開設運動の機運高まるなかで、新島は演説草稿「愛人論」によって、愛国至上主義に対する疑義を明確にした。「愛国」は「書生の空論」であり、「風雲に登る階梯」（立身出世の手段）であると退け、「外国人を敵視する憂いなき能わず」と警戒した。

上揚文は、世界秩序の根源である神を理解することは、「愛人」、すなわち「隣人愛」と等値であるとしたうえで、その愛に徹するようにと訴える。「人をあざむき人に損亡をかけ、己れを益し、大いに我が子など人智者と云いてほこる人多し」と嘆いたあとに、その利己主義の由来を「人に愛人の教えなきによるなり」と説明した直後に書き込まれている。草稿の片隅に後から挿入されたように見える。新島にとって「愛（敬）神」と「愛人」の平衡は、忘却されてはならないものであった。

「神を愛し、隣人を自分のように愛せよ」（マルコ12章33節）と教えられたイエスの神を「天地の主宰」と敷衍し、創造主へと注意を喚起した。「愛人」は、「天地万物を愛する」ことにも等しい。近代科学を必須の課題とした新島は、しかし神と科学を都合よく区別する風潮を懐疑した。そこにはすでに環境問題への視座が胚胎している。「人の目鼻口付きを愛する等は甚だ下等の愛」（後半部）も今日のルッキズム（外見至上主義）批判を思わせる。

本質を探究しつづけた新島の言葉はいつの時代にも新しい。